特44
86

橘流
梵琴
宗家
右
橘池翁先生校閲
童
天保
左
刊
完

265
109

中庸

意思結

明治
43. 6. 27
內交

己酉初夏

柳江題

帝國圖書館藏

石堂丸

旭翁作

月に叢雲花に風
散りて果敢なき世の習ひ

扨も筑前筑後肥前肥後
大隅薩摩六ヶ國

探題守護を司る
加藤左衛門重氏は

娑婆の無常を感じつ
故郷に妻子を残し置き

諸國修行と出で給ふ
十年せ餘りも過てのち
父は高野にたはすると
母諸共に立ち出でて
やがて紀州に著けるに
實に光陰は矢の如し
石堂十四の春の頃
風の便りに聞きしより
なれぬ旅路もいとひなく
爰に靈場高野山
弘法大師のいましめに
左れば石堂本意なくも
東雲鳥どもうとともに
鳥もかよはぬ屏風岩
三枯の松に五枯の杉
石堂丸
女人の登山は禁制なり
母を麓に殘しおき
杖を力に登り行く
善惡二つのかけ柳
通り過ぐれば峰樂師

無明の橋にかゝる時
其日は大師の花の役
光明眞言唱へつゝ
石堂丸は登り坂
知らねば側に立ちよりて

刈萱道心重氏は
右に花籠左に珠數
御山を下り給ふ時
互に親と子我子とも
見上げ見下す顔と顔

二人の袖のもつれあふ
其時石堂刈萱の
御尋ね申す御僧樣
今道心となられしを
何卒教へて給はれと

血筋の因縁是非もなし
衣の袖に取りすがり
この御山にて我父の
御存じあらば御情に
聞て刈萱訪りつ

見れば幼き一人旅
國は何處名は何と
國は筑前博多にて
加藤左衛門重氏と
持ちたる花籠取落し

御身の尋ぬる父上は
問はれて石堂涙ぐみ
採題守護を司る
名のれば刈萱驚きて
扨は我子かなつかしやと

立はんとせしがまて暫し
自から心を勵ませど
露かつゝか石堂の
幼な心に怪しみて
若し父上にてはたはさずや

御山の法は破られず
恩愛の涙せきあへず
顔にかゝりてぬれければ
歎かせ給ふは何故ぞ
父上ならば片時も

早く名乗りて下されと
落る涙をふり拂ひ
御尋ねありし其人は
兄よ弟と睦みしに
空しくなりし不便さよ

言はれて刈萱道心は
我は父にはあらねども
多き御弟子の其中に
去年の秋の末ッかた
海山越えてはるゝと

尋ね来たりし甲斐もなき
覺ず涙を浮べしと
わつと許りに泣きしづみ
定めて御墓ぞたはすらん
教へなされて給はれと

其心根を思ひやり
聞くに石堂たどりきて
そは誠にて候か御僧よ
あはれ御慈悲に其墓を
願へば刈萱是非なくも

石堂丸の手を取りて
石碑の前に連行きて
はかなくなりし印ぞと
のふ情なのこの有様と
頓て取出す麻衣

其頃建てし新らしき
是ぞ其方の父上の
見るより石堂まろび伏し
どこう涙に暮れにけり
是れは姉君が父上に

逢ふ事あらば進ぜよと
あふよしもなき悲しきよ
此由聞かせたまひなば
不便の者と思召し
たつた一言聞せてと

携へ来しもあだとなり
梵にまします母上の
さぞや歎かせ給ふらん
石堂尋ね来たかよと
甲斐なき御墓に執りすがり

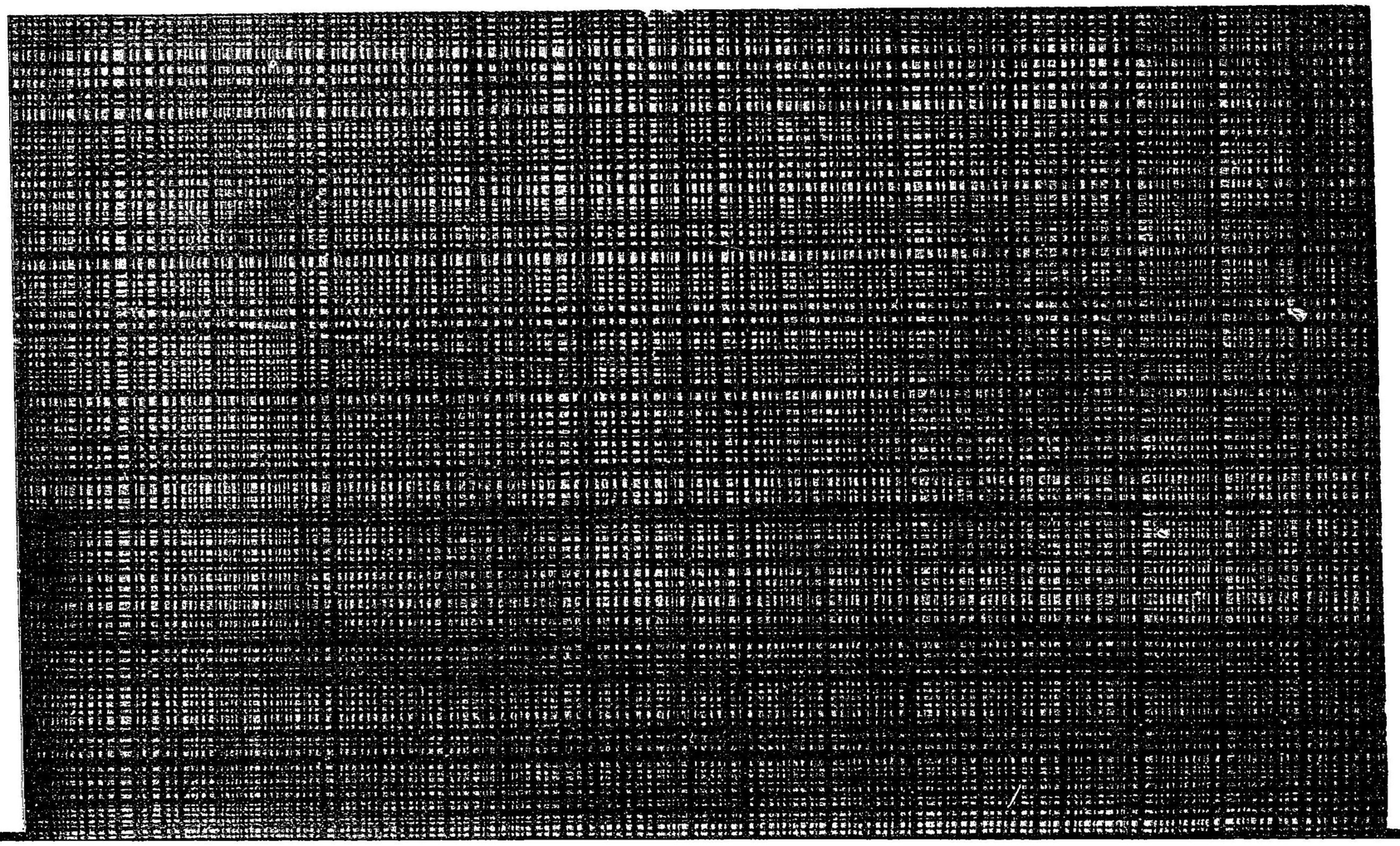
前後も知らず泣きければ
堪へ〻胸のため涙
共に涙に暮れにけり
石堂丸に打向ひ
涙は佛の為めならず
後に立ち〻刈萱も
思はずわつと聲をあげ
斯ては果てじと刈萱は
歎きたまふは理なれど
早々麓に下り行き

母へ孝行盡されよと
涙ながらに立ち上り
杖にすがりて下り行く
後より見送る刈萱の
思ひやるだに哀れなり
さとし給へば石堂は
振りかへり見々なく〻も
幼な心を察しやり
心の中は千萬無量
たもひやるだにあはれなり

明治四十三年六月十日印刷
仝　四十三年六月二十五日發行

發行兼編輯人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　有村彌四郎

印刷人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井護三郎　電話東四五五九番

印刷兼發行所　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井改進堂　長電話東二七〇番

265
109